

アサギマダラは食草のガガイモ科植物が高砂地区のあちこちにあるという状況ではなく、年に数回、フワリフワリと緩やかな飛翔で高砂公園や住宅街の花蜜を求めて舞い降りてくるのを見かけるていどで、身近なチョウとは言いがたいのですが、キタテハの項で触れた”移動”に絡む本命のチョウであり、NHK による TV 放映や、中国への渡りというホットな情報も入るというタイミングで紹介することにしました。アサギマダラが緩やかに舞うように飛ぶ姿はとても美しく絵になりますが、一度驚かすと見るみるうちに天空高く舞い上がって、やがては見えなくなってしまう。この離れ業は、あとで触れる長距離飛翔能力の一端を示すものです。また、チョウを採集して標本にする際、胸部を指で強く圧迫すればそのチョウはもはや飛べないのが普通ですが、アサギマダラは相当強く圧迫しても、一時は死んだふり（擬死といいます）をしてみせ、そのままにしておくとやがて何事もなかったかのように再び飛び去ってゆくという、強い生命力をもっていることでも有名なチョウです。ちなみにチョウの心臓は頭から胴体、尻尾部分にかけて体の上部を帯状につながる組織で形成されており、人間の心臓とはまるで違います。

アサギマダラが属するタテハチョウ科マダラチョウ亜科には、伊丹昆虫館などで飼育個体として見るこ



とができるオオゴマダラなど、亜熱帯地域の沖縄や八重山諸島に生息する種がほとんどで、北海道や東北などの寒冷地まで分布しているのはこのアサギマダラだけです。アサギの漢字表現は「浅葱」で、左の写真に見られる微妙な薄青色= 浅葱色を有するマダラチョウとの命名です。太陽光線のあたり具合によっ

ては右写真に見られるように翅表の浅葱色部分が真珠光沢を放ち、美しく輝いて見えます。

アサギマダラは秋には北日本から南西諸島まで長距離南下飛行をし、春には次の世代がその逆コースで北上という大移動を繰り返すことがわかっており、2008年12月にNHKが放映した「アサギマダラの“心”に迫れ～謎のチョウ 1500キロの旅～」というドキュメンタリーでその実例が紹介されました。福島県裏磐梯高原デコ平から飛び立ったアサギマダラが長野県大町や愛知県三ヶ峰山などに立ち寄りながら1500Kmも離れた奄美大島の喜界島までの長旅をする様子を追跡した記録です。東京在住の内科 Dr 栗田さんが福島でマーキングをして以降、途上の上記2箇所を含め、実際に喜界島までも足を運んで、1500Kmもの距離を飛んできている自分がマークしたアサギマダラとの再会を果たし、胴体部を優しく手指にはさんでマーキングの確認をされる場面は感動的で胸にジーンと迫るものがあります。南下、北上いずれの場合も、出発地を飛び立つ時点で、そのチョウたちは1000Km以上も離れた目的地について何一つ情報をもっていないわけで、いったい何を指標としてそのような長旅ができるのか、アサギマダラの挙動は謎に満ちており、栗田さんだけでなく多くの人が関心をもって観察を続けています。この放映の数日後、輪島市から中国浙江省まで1644Kmも飛んでいった個体があったことを台湾の研究者が明らかにして、日本から中国への渡りは初めての例だとNHKのTVニュースや新聞でも報道され、アサギマダラ移動の不思議がいっそう脚光を浴びました。アサギマダラの移動に関する継続的な調査結果を知りたい方は、インターネットで次の「アサギネット」<http://www.2h.biglobe.ne.jp/~pen/asaginet000.htm> にアクセスすることで多くの新たな情報がえられます。外国ではカナダやアメリカの北部からメキシコ高原まで越冬目的で3000Km以上の長旅をするオオカバマダラが有名で、越冬地ではヒノキ科の大木に1400万頭/本もの個体が密集して葉、枝、幹をおおい尽くし、原地の人々が「チョウの木」と呼ぶほどです。このオオカバマダラの場合も、旅に出る段階で越冬地に関する情報は何もないはずなのに、飛翔方角の探知に地磁気を利用していることが証明されているとはいえ、前年の世代が越冬したのと同じ地域と同じ木を探り当てるといのはまさに自然の驚異で、この謎はまだ解かれていません。

